特42
914

繪入
實録

鏡山女庭訓

全

金松堂梓

金松堂畫元

歳英画

叙

往古より孝女と呼び烈女と稱し今に美名の赫々たる者い枚擧に遑あらぬと雖も奚ぞ容貌の美あるを賞せんや假令楊貴妃の如き艷なる者も玄宗帝を蕩すに止り褒似の美と雖も周王其國を亡ふ耳にして豈嬋娟粧わる其之を賞する者の有ん然るに本編の美談に於る劇場に於て能く脚色興行する處なり然れ共局澤野を以て岩藤と呼び於道と指て尾上と稱しお佐津を又お初と云ふ斯の如きい大人に於て知るべ事あるが兒女幼童に至ついて其正説と知る者稀なり故に確説と擧ぐると雖も紙數い固より文字も亦限り有るを以て事蹟と審悉蒐集なす事能いざ其要々たると摘綴し以て兒曹に示す而已

隱見亭主人識

繪入鏡山女庭訓
實錄

東京隱見亭霞船編

○第一回

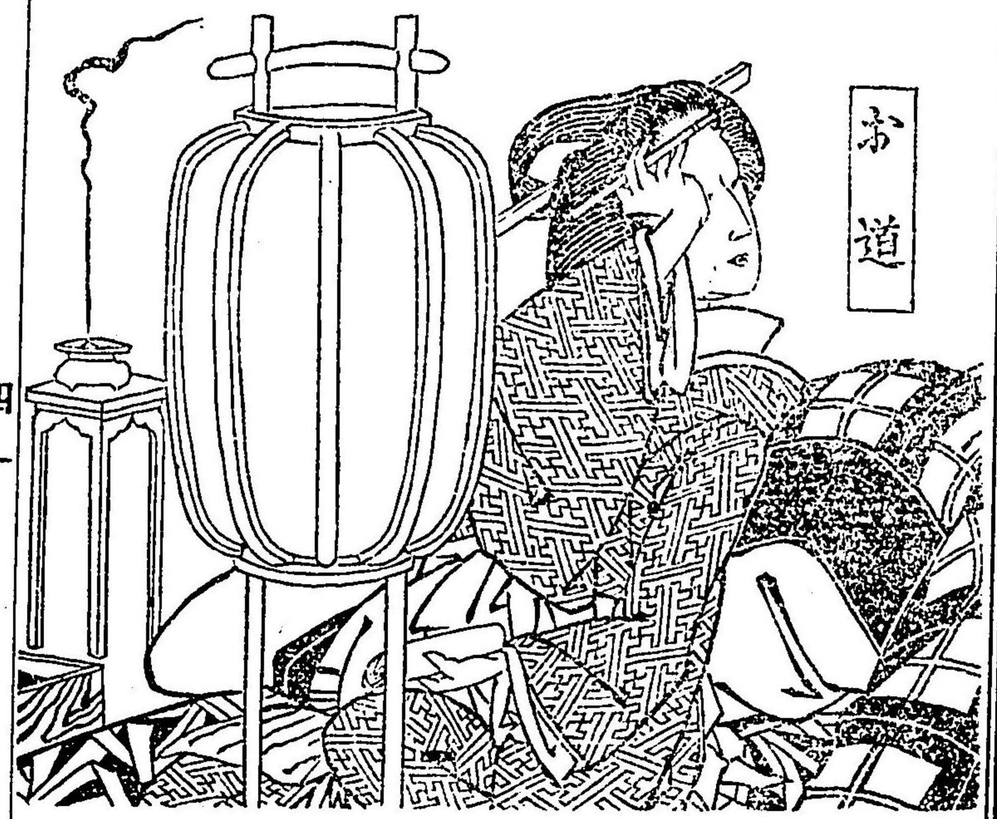
頃い享保九甲辰の年にして石州濱田城主松平周防守康豊と申すは賢才の聞へ有り又奥方い龜井隱岐守の御息女なるが御附人にて落合澤野と云ふ老女あり此時年六十に及べど身躰壯健なる耳か心荒々敷多くの女中を呵り散し無慈悲の事のみを做す迚も上に立局の事なれい皆怕恐れて在しが又中老を勤る岡本お道と云ふは此時廿一にして心優しく殊に遊藝を善くす然るに卯月二日の事なるが小雨降出し時鳥一聲音信しに奥方いお道を召琴を彈べさせよと仰せ有しに侍女の衆駈來り奥様のお召なり早く〳〵と急立られお道い衣服を手早く改め廊下に來しが自分の穿べき上草履の見へざれい下女のお佐津を頻に呼び草履を取寄んとする間も無く又もや奥にて呼立られ心ならずも有合す草履を穿て馳出し御前にこそい出たりける此時奥方よい御機嫌能其方を呼しい別儀に非ず今初時鳥を聞に付仇に聞んも心なし琴を調べよと仰せ有しにお道い直様妙手を盡して御聞に入しに奥方にい愈々御悦喜淺からず夫より數多の侍女を殘らず召てお盃を下され益々御機嫌能入らせられしが此折お廊下の方にして皺枯聲を振立て局澤野の騷ぎ居たるにお道い何心なく是を聞に私が草履を誰が穿しや足が有ても行事ならず馬さへ我踏を知ると云ふに足元知らずの女の所業たれが穿しか腹立しや草履は何處へ穿ゆきしや誰だ〳〵と嘯き立聲を聞付お道は驚き周章て其處へ駈來り廊下へひたと兩手を着お局様のお草履とも心附ずに穿ま

したれば何卒お免し下され度唯奥様のお召の急にて取急ぎし儘の粗忽よりお局様のお草履とも知らず實にお丁譯も御座りませぬ此まゝ御免遊ばしてと局の前に草履を直し頭を廊下へ摺付て詫ればいよ〳〵眼を怒らしお道の面を睨み付其方は紛ひ無き武士の娘じやと云ふ事だが又町人の娘にもせよ武家に奉公するからゝ義理と云ふを知らねば成らず他人の草履を斷りも無く穿た上咎められたら勘辨しての免せのと恥も知らぬと云ふ者なり男同志の事ならば弓矢を取るよも至るべし年ゝ寄る共落合澤野じや勘辨ならぬ處なれ共詫る者なら兎も角も此草履をば其方ゝ穿て又其跡を私に穿とゝ余り蹈付た仕方である草履ゝ入らぬ穿ませぬ定めて其方の欲くも有て斷りも無く穿しなるべしお道よお前に進ずる程に以來勝手に穿が宜と云ひつゝ草履を足に掛お道の顔に確と蹴付奥の方へと馳行ける

○第二回

斯てお道ゝ澤野のためよ草履を顔へ蹴付られ無念さ悲しさ口惜さ彼ほど手を着き詫る共聞ざるのみか剩さへ草履を面へ打付て其儘奥へ往しこそ余りと云へば腹立しや朋輩衆の見る前にて斯迄恥辱を受るといふゝ生ても居られぬ我身の上と悲歎の涙胸に滿瀾をなして居たりしが自ら心を取直し自分の部屋に返りける此時下婢のおさつに於てゝ委敷樣子を知ると雖も素知らぬ体にて出迎ひ旦那樣にゝお早いお下り今宵ゝお召も御座り升まい偶々の御休息ゆゑ御酒を一つ召上れお肴も准備致しましたと鮑の酢貝に茗荷たけを取合せたるを持出しけれゞお道ゝ殊に打悅び其方ゝ毎も斯く迄に心附て下さるゞ何から何迄眞實に一年餘りの勤め方此身を實に介抱て心遣ひゝ嬉しぞや心に障る事もあら

んに少しも嫌な顔さへ見せず實に其方と我身とゝ姉妹の樣に思ゝれて今更尙も悅べし今宵ゝ我身も御酒を飲日頃結ぼれし氣を晴さん其方も一盃飲してと平常に替りし詞を聞さつゝ兩手を着ながら是ゝ〳〵旦那樣勿躰ない今のお詞さつがお酌を致しますと銚子を取て勸るにお道ゝ世にも嬉し氣よ之より互に盃を取替しつゝ娛みて主從二人差向ひ尙も悅び居たりしが頓てお道ゝ立上り簞笥の內より取出すゝ緋純子に牡丹の縫したる帶一筋丹後縞の小袖を持來りさつや是を其方に取す着と致して今一獻すごして給へ此二品ゝ先つ頃より進らせんと心計りゝ存知たなれど折を得ずして竟取らせず凡そ人の身の上ゝ翌日にも知れぬ者なれゞ我身ながらも持病の發り又どの樣な事も無き共いへず遺り度物を留置て萬一の事ありもせゞ心に掛りて成ませぬ添け無いと云ふてたも遠慮に及ゞず受納めてと只管お道の勸るにおさつゝ叭と平伏て是ゝ〳〵旦那樣又其樣な品々を下さり升ゝ此身に餘りて恐れ多く思し召ゆゑ戴き升と手に取上て押戴き又私しの願ふまでお預り置下さりませとお道の前に差戻せゞお道ゝおさつの顏をゞ見詰去り迚ゝ又何事ぞ今云ふ通り人の身ゝ知れぬ者より思ひ立其二品を取せし者なり受納ずば氣に濟ず是非よと言れて辭するも難く左ほど迄に仰せるを御辭退しては却て濟ず頂戴いたすて御座り升と再三おさつゝ押戴き嘸兩親の見ましたら私しより百倍有難がる事と今より存じ申ます今宵は夜更に及びしゆゑ最早お休息遊ばせとお道の夜具を取出し臥戸に敷て機嫌を聞き襖引立ておさつにゝ自分の部屋に入りにけるお道ゝ臥戸に入りたるがおさつの寐入りし樣子を伺ひ窃に起出て行燈の燈を自ら搔立抔し硯引寄せ墨すり流し筆を採しが目も眩み心も茲よ消かゝる又燈火



を掻立て落る涕は露平硯の海も越ぬべし書ては涙おし拭ひ泣ては文章を書綴り讀畢るにも早已に我玉の緒も今を限りと愈増涕留め兼ね聲洩さじと忍び泣兎角なす内何時かに最早夜明に及びしゆゑ髪撫付て衣服を改め心細くも悲しみの文は二重に封を付て文箱に納め手道具品々取集め其外書像の地藏尊又觀世音の像を添へ風呂敷に包みて夫よりハ法華經一卷を讀終り佛の御名を屢々唱へ燈りを消て襖を開きさつよ〳〵と呼聲に唄と答へて忽ち起出て旦那樣にハお早いお目覺今寐たやうよ存じましたが寇に夜明の早い事と言ひつゝ其處等を取片附け頓て勝手で立働く程もあらせず取出す朝餉を勧めて兎や角と機嫌を取々給仕を爲す心の内を押量りお道は尚又悲しみの胸は張裂ばかりなり然どおさつに悟られまじと笑ひに紛らし朝餉を濟せ頓て取出す文箱と包み此ほど宿から便りも無くお両親樣の御樣子も聞ず其方ハ又々御苦勞なれど此二品を持參して宜敷ヤて下されよ委細の事ハお文に認め置たれば別に口上も入らぬゆゑ少しも早くと言付られおさつは手早く膳部を片付け亂れし髪を掻上抔し衣服を改め取急ぎ左樣なら旦那樣直に往て參り升ると渡せし包みを手に携へ心ならずも立出けり

○第三回

斯くてお道ハ立出しおさつの姿の見へる迄廊下に於て見送りけるが部屋に戻りて打倒れ絶へ入る計り忍び泣又おさつにも知らずして立出たるハ不便さよお雙親樣があの文を御覽ぜされし事ならバ其お歎きハ如何計りおさつも知らバ驚きなんと思へバいよいよ胸塞がり起てハ轉び伏てハ起須臾正体なかりしも自ら心を取直し最はや覺悟を極めし身の今更臆して人に知れ留めもされてハ死に優る尚恥なりと諦めて名殘をしさハ限

り無く何時まで斯て歎いても最早返らぬ我身の上未練の事ゝ致さじと佛名しゞ〳〵念じつゝ何卒淨土へ導き給へと祈るも聲ゝ出ずして心の内に伏拜み死出の袿の白無垢や淺黄羽二重の衣服を重ね白綸子の帶をしめ左の手に法華經を握り右手に來國光の九寸五分是も父より給ゝりしが死ねとの事か情なや今此時の本望と三度刀を押戴き咽喉を深く刺貫き其儘其處ゑ打伏て果敢なく茲に消たるゝ最も憐の事なりける此時享保九年卯月三日の朝巳の刻にて時ゑ年二十一歳なり却説おさつゝ斯とも知らず主人の用事を云付られ屋敷を立出て十町ばかりも來りしに何と無く胸さはぎして心地わしく如何なさんと猶豫居しが不圖思ひ出し其事ゝ昨日の夕方旦那樣にゝお局樣に恥辱を受只管鬱氣で在せしが御病氣にても出ぬゞ宜と主人思ひのお佐津ゆゑ心に掛つゝ來りしが日比谷御門外まで來る折しも愈々胸のさはがしく足さへ進まぬ處から何か我身に凶事でも有るか俄然に心地の惡きといふゝ不測の事と思ひし見れゞ之より矢野倉迄ゝ往れまゝ一先お屋敷へ立返り安心致した其上に再度往ても遲かるまじ若しお呵りを受たなら途中で急病の發りしとて虚言を吐ても相濟べし左右じゃ〳〵と心を定め飛が如くに元來し道へおさつゝ急ぎ返るが否お道の部屋に來て見れゞ蒲團を重ね其上に夜具を半引掛て白裝束も朱に染み胸の邊りゝ一面に血汐の流れし形狀なるにお佐津ゝ吃驚仰天し堰來る胸を漸く鎭め旦那樣にゝ淺ましい此お姿ゝ何事ぞ斯ほどお覺悟ありしなら一言お咄し遊バさぬゞやお宿の使と出し拔て御自害ありしい情なし女でこそあれ御家來なれゞ又如何樣にも宜敷やうお咄し敵手に成ます者を餘りと云へゞ御不便やと我を忘れて聲を發泣叫ぶのも道理なり夫より尙も哀しさゝ何に譬

へん樣も無く俱に死なんと覺悟をせしが思ひ返して死を留まり我身の茲に死せゞ迚益なき事夫よりお局を切殺し敵を討て其上にお所置に成る共苦しからず然り〳〵と胸に問ひ胸に答へて死骸に向ひ旦那樣にい嘸かし御無念で御座りましやう佐津が戻りし上からい貴君に犬死いさせませぬ詠めて在せ唯今に局澤野を刺殺し敵を討て差上ずと生たる人に言ふ如く屏風を深く立廻し其身い帶を締直し局の部屋に馳行ける

○第四回

夫よりお佐津い馳出し局の部屋に行んとするよ澤野い自分の部屋の前にてお茶の間女中のおすわと云ふ者に向ひ何やら無生に皺枯聲を振立て呵り懲して居る處へお佐津い來りて兩手を着お局樣へ急なる事ゆゑお直に申上ますが私し事いお道の下女で御座り升唯今主人お道事急に何やら仰反りはや生体も御座いませぬ何卒直樣御覽じて宜敷やうに願ひまするとゝ寔しやかに述ければ局い一人打笑ひ夫い定めし癇でも發し倒れた事でも御座るべし兎も角私が見た上にお醫師なり共招いて進ぜん案内しやれと何氣なく來るに悅び先に立お道の部屋へ立入けれゞお佐津い屏風引除お局樣此病休を御覽あれと片邊よ坐して扣へたり澤野い斯と見るよりも口さへ開ず驚き周章立去んと爲る体なるにお佐津い忽ち飛掛り老朽婆覺悟をせよ能も大事の御主人樣へ草履を以て顏を打多くの人の見る前にて恥辱を與へし其爲に誰にも面を合されぬと是この通り御自害ありしぞ己れい人を口頭で殺して置て其儘に勸め續いて居やうとい太い心の曲氣老婆め於道の下女の佐津なるぞ死んで恨が言度ば每晩なり共來てぬかせ思ひ知つたか答へたかと胸元摑んで引摺倒し腹立、

しや口惜やと其處よ此處よと引摺廻しお道の屍に打重ね透さず上に乗掛りお道の自害に用ひたる九寸五分を採上て局の胸を刺貫き拇も拳も貫徹よと再三再四突貫き遂に本望を果したり又此より先にお茶の間女中と澤野が下女い局の後より附隨ひお道の樣子を聞んと部屋の外に扣へて居しが何やら内の騒がしければ二人諸共差覗くに局いお佐津に刺殺され朱に染たる体なるにぞ大聲上て喧き立お局樣を殺したい澤野樣が殺されたと騒ぎたちしに多くの女中い等く驚き駈廻り上を下へと返しけるお佐津い胸を撫おろし噫嬉しやな悦ばしや首尾能敵を討果し旦那樣にも嘸々御無念の晴ましたらん佐津も押付お跡よりお供を致しやすべし冥途に於てお待あれと又も生たる者に云ふ如くお道の死骸を伏拜み其身い側に扣へ居たり此騒動に奥家老堀野次郎太夫並に小谷利右衛門も駈付來りお道の部屋に出張し屏風を除き見てあれば澤野いお道諸共に血汐に染て相果居たり其側にお佐津い聊か臆せし体無く顔の色さへ變らずして扣へ居しが堀野小谷の兩人を見るより平伏て私しい道の下女左津と申す者にて御座り升と述る詞も爽然に落付拂つて扣へたり

○第五回

亦説お佐津い堀野小谷の尋問を受私し主人お道ことお局樣より恥辱を受他人へ面を合されぬと自害致して御座り升夫故恐れ多き事ながらお局樣を欺き寄せ即座に仇を討ましたれバお上の御法通り願ひ升ると詞濁らず述けるよ堀野小谷も篤と聞き主人の敵を討しと有バ定めて深き仔細の有る可し併し女の分として近頃珍らしき汝の心底兎も角吟味致す可し迚小部屋に入置番人を附てお左津を護らし此段周防守殿へ言上し吟味役にい家老藤崎要堀野次郎太夫小谷利右衛門

目附兩人物頭一人足輕十人列を揃へて白洲へ佐津を呼出して吟味せられたり周防守殿にハ襖の陰にて之を聞れり時に次郎太夫ハお佐津に向ひ其方如何なる意趣を以て局澤野を殺害せしや且又其方の主人道こと自害致せし一伍一什僞り無く申上べしと尋問を受おさつハ聊か膝を進まし私し事ハ昨年三月より奉公致し今日迄勤め居りし趣きを申立たり又其方ハ今朝お道の部屋に在りしや又他出にても致せしかとお尋あるゑ五時すぎ迄ハ部屋に居りハ得共夫より親元へ使を申付られ久箱文庫の包みを請取途中日比谷御門外まで到りしに何やら俄に心地あしく胸騒ぎ致しハ儘立返りハ事ゆゑ道の親元矢の倉へハ往申さず主人の自害致せし事ハ昨日の夕暮奥様より急のお召にて馳出しに折柄お廊下に上草履の見へざる處又もお召の急なるに誰方様のか存じませねど其處ゑ有合す草履を穿て御前へ出しが御用の濟て戻る折お局様がお腹立にて此身の草履を斷りも無く穿し迚何ほどお詫を申てもお聞解なく種々お呵り遊ばして其上右の草履を以て主人の身へ蹴付られ夫より部屋へ引取しが私し事ハ色々慰め御酒を勧めて夜深まで笑ひ娯み居りました處小袖と帶を取出し無体に下されまし

したが今朝御自害をなされしハ全く昨夕お局様に草履を以て恥を受夫故自害せられし事と存じ刺殺しましたに相違御座なく其時お茶の間のおすわどのも見舞にお出と覺へ申ハ此外申上ます事ハ御座りませずと明白の言上に何おすわをも呼出されお尋あるに佐津の口上に少しも違ハず又親元へ贈らんとせし久箱をも取寄られ手跡を多くの女中に見せしめけるに皆お道の筆跡に相違なき旨申上しが其遺書を披見ありし吟味の人々ハ何れも涙を浮べけり夫より周防守殿家老を以て仰せ出されけるハ澤野が弟落合嘉内

を呼出されお道の自害澤野がお佐津に切害されし始終逐一ヤ聞られ屹度御呵の上向後さつへ對し恨がましき事致す間敷と嚴重にヤ渡され又お道の親岡本佐五右衞門を召出されお道の自害致せし事より下女佐津なる者即座に敵を討し事柄を詳細ヤ渡され死骸の儀ハ上の思し召を以て御菩提所へ葬り遣ハす旨ヤ聞られ久箱文庫其他諸道具引取ヤす可くと思ひ寄らざる仰せに佐五右衞門も驚きしが悲歎の涙を押匿しお請に及んで歸りける心の内を推量りヤ渡せし人々も後にて涙浮べけり

○第六回

又お佐津の親松田助八を呼出されお道の自害を致せし事より直ちに仇を討し事を云聞られ落合嘉内より取置たる一札を渡され向後決して澤野が親戚より意趣ケ間敷事無きをヤ告られ一旦召連引取べき旨を言渡され立歸り際に拙宅へ立寄扣へ居るべしとの事に助八ハ堀野が宅へ至る間も無く次郎太夫の來り此度お佐津殿の働き言語に述難く宜き丹人の龜鑑なり迎我君に於ても深く御感あり就てハ歸宅せらるゝ共四五日他出御無用あり尤も吉事と存ず

れば御心配にハ及びヤさず此段御内意に御座ると言渡せば助八有難き旨お請に及びて引取ける其翌日に相成けると岡本佐五右衞門の來りしにぞお佐津も夫へ走り出しが佐五右衞門ハ涙ながらに挨拶終り扨此度の不慮に付お佐津殿の御働き何とお禮のヤさう樣無く草葉の陰にて娘お道も悦び居るべし就てハ願ひの趣き有り何卒御息女を拙者の娘に下され度定めて此方も大切なお娘子てハ御座らうが我等夫婦の心の内をお察し有て此願ひを是非に聞濟給はり度妻も歎きの其中に娘の替りと大切に御寵愛を致しヤさ

んと只管望むに助八も大に悅び且又御内意の趣きを告御沙汰濟の上差上んと堅く約し佐五右衛門い尙又お上の吉左右を待んと歎の中にも笑ひを含み然らば之より寺へ參りお道にも申告べしと此日い暇を告て歸りける又同月七日堀野方より出頭すべき旨達しの有しより松田助八の罷り出しに堀野次郎太夫小谷利右衛門の兩人よりお佐津どの事此度中老に召出されれ前々の通り五十俵五人扶持引越料として三十兩下し置るゝ趣き申されければ其悅び大方あらずお請に及んで直樣岡本の家に至り御沙汰の趣きを申傳へ又お佐津を佐五右衛門の娘に遣はしけるにぞお道の弟十四才になる三郎五郎又七才になるお宮へも姉弟の盃を濟せしい歎きの中の悅びにてお佐津い其月十五日周防守殿お屋敷に引移りお上より名を下され松田の名字を取り松尾と呼せ又翌年四月二日三郎五郎十五才よ成しを召出され知行二百石を賜はり近侍の列に加へられ姓を正木と賜はり佐五右衛門い固より松田助八も御出入を致し何れも繁昌致しけるといふ

繪入實錄 鏡山女庭訓終

御届明治十八年一月廿三日

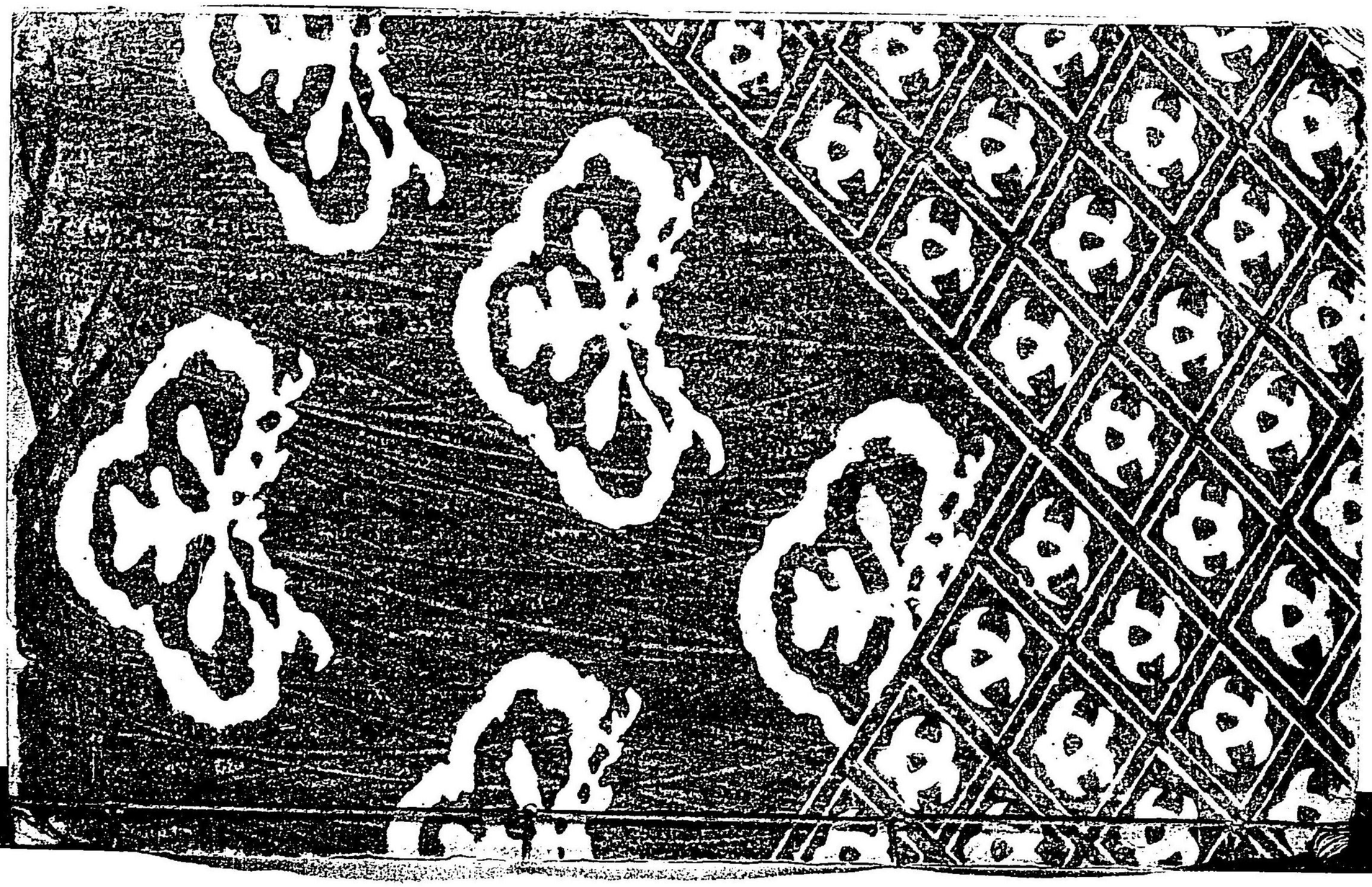
定價四錢

編輯人 東京府平民 岡田良策 淺草區西三筋町三十四番地

出板人 東京府平民 辻岡文助 日本橋區横山町三丁目貳番地

金松堂

一繪入實錄	宮本二刀傳 全 一冊	一同	佐倉義民强訴傳 全
一同	天一坊物語 全	一同	白子屋於熊命月輪 全
一同	越後傳吉孝義錄 全	一同	赤穗精義名士傳 全
一同	鏡山女庭訓 全	一同	小栗照手優美傳 全
一同	伊賀越荒渡美談 全	一同	伊達黑白公判錄 全
一同	新編曾我物語 全		



特42
914

繪入
實録
鏡山女庭訓
全

金松堂梓

205098-000-8

特42-914

鏡山女庭訓

隱見亭　霞船／編

M18
EDV-0101